

平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 法文/教授

氏 名: 尾崎 孝宏

授業科目名	文化人類学実習
研修先(国・地域) 滞在地	全北大学校(韓国・全羅북도全州市)
研修期間	平成30年8月26日～平成30年8月31日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>本研修の目的に即して成果を挙げると以下のようなになる。</p> <p>1.韓国における異文化体験を通じて、自身の持つ文化的バイアスを自覚する:本年度は前年度に引き続き、事前の調査計画のブラッシュアップを入念に行わせた。その結果、学生が考える調査の問題設定および調査計画に無意識的に介在してしまう日本的な文化的バイアスの存在に事前に気づき、修正することができた。この点は質的調査において重要なポイントであるため、前年度と比較しても進歩が見られたと考えられる。</p> <p>また、本年度は調査計画が練られていたことが幸いし、韓国訪問段階において調査計画に残っていた日本的な文化的バイアスも現地調査の比較的早い段階で参加学生が自覚でき、完全とは言えないまでも適宜調査計画を修正することができた。その結果、社会調査実習を円滑に進めるとともに、無意識に介在する文化的バイアスの影響について学生自身が強く自覚することができた。さらに、こうした経験を通じて自文化を相対化する必要性も自覚することができたと思われる。</p> <p>2.鹿児島大学の学生と全北大学校の学生が協力して、初歩的な社会調査を体験する:今回の社会調査実習では、現地の調査活動については基本的に教員はタッチせず、両校の学生の自主性に任せて現地調査を行わせた。昨年度より、ホスト側の大学生にとってはホームとなる場所(今回の実習であれば全州)に絞って社会調査実習を実施することにより、学生が自主的に行動できる余地が拡大したとともに、費用対効果の面でも大幅に改善することができた。また本年度は、資金の都合により全北大学校の学生が7月末に来日し、鹿児島で先に社会調査を行っていたため、鹿児島大学の学生にとっては学生間の信頼関係がすでに構築された段階で全州での調査が実施できたため、前年度に比べてよりスムーズかつ立ち入った内容の調査が可能であったと思われる。</p> <p>昨年度末、本実習の経験をモデルとしてテキスト化した内容をウェブサイトに掲載した。(https://kadai-ozaki.net/kuaf-2017/)。また、当該サイトの内容紹介を2018年6月に行われた日本文化人類学会研究大会で行い、全国で同様の試みを模索している文化人類学系の大学教員から少なからぬ反響を得た。本年度の成果も上記ウェブサイトに追加する予定であり、また甲南高校における高大連携の総合的学習の指導などにおいても教材としてウェブサイトを取り上げており、こうした県内の高校生をはじめとする若い世代へのフィードバックを中心として地域貢献を目指している。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本プログラムは、基本的に鹿児島大学の学生が韓国に行って全北大学校の学生と合同で社会調査を行うという枠組みで10年以上継続しており、大きな成果を挙げているとともに年々成果が向上している。研修の円滑な実施のためには外部資金等による経済的援助が得られた方が望ましいが、近年の補助金の傾向として短期(1-2年程度)の資金を次々と探して獲得する必要に迫られている。むろん補助金は毎年獲得できるものではないので、本事業のような学内での措置が長く続くことを祈ってやまない。</p>	